

武蔵野日曜聖書講筈

七度の七十倍

——マタイ伝第18章21〜35節——

1959年6月28日

小池辰雄

七度を七十倍するまで 地国の天人 一万タラントの負債 神の赦しの法則 赦しの神の実
在にぶつかる 十字架のキリストにぶつかる 無にしてくださる 十字架を負うことが楽しい
ことになる 砕けの魂

【マタイ18】

21ここにペテロ御許に來りて言う『主よ、わが兄弟われに対して罪を犯さば幾たび赦すべきか、七度までか』22イエス言いたもう『否われ「七度まで」とは言わず「七度を七十倍するまで」と言うなり。23この故に天国はその家来どもと計算をなさんとする王のごとし。24計算を始めしとき一万タラントの負債ある家来つれ来られしが、25償い方なかりしかば、その主人、この者と、その妻子と凡ての所有とを売りて償うことを命じたるに、26その家来ひれ伏し、拜して言う「寛くし給え、さらば悉とく償わん」27その家来の主人、あわれみて之を解き、その負債を免したり。28然るにその家来いでて、己より百デナリを負いたる一人の同僚にあり、之をとらえ、喉を締めて言う「負債を償え」29その同僚ひれ伏し、願いて「寛くし給え、さらば償わん」と言えと、30肯わずして往き、その負債を償うまで之を獄に入れたり。31同僚ども有りし事を見て甚く悲しみ、往きて有りし凡ての事をその主人に告ぐ。32ここに主人かれを呼び出して言う「悪しき家来よ、なんじ願ひしによりて、かの負債をことごとく免せり。33わが汝を憫みしごとく汝もまた同僚を憫むべきにあらずや」34斯くその主人、怒りて、負債をことごとく償うまで彼を獄卒に付せり。35もし汝等おのおの心より兄弟を赦さずば、我が天の父もまたなんじらに斯のごとく為し給うべし』

●七度を七十倍するまで

21ここにペテロ御許に來りて言う

ペテロは弟子の頭だともえまして、すぐキリストに代表してものを言うようなわけでありませんが、



『主よ、わが兄弟われに対して罪を犯さば幾たび赦すべきか、七度までか』
と。当時そういう場合には、

「二度までは赦せ、しかし四度めからは赦さなくてよろしい」

というような、モーセの戒律、旧約のユダヤの戒律があるんです。けれども、イエスの福音に接してペテロは、そのようなことでもあるまいということを感じて、

「幾たび赦しましょうか。七度まででしょうか」

と。ペテロとしては、「七度まででしょうか」と聞いたのは、人間的に二度、四度、五度、六度、七度——「七」という数字はいろいろな意味において完全性を表す数ですので、多少そういう気持もあるかもしれませんが——とにかく「七度まで」と言ったその気持は、人間としての極限、限界と思われれます。「ギリギリ七度くらい」というようなわけなんですよ。ところが、キリストは、

22 イエス言いたもう『否われ「七度まで」とは言わず「七度を七十倍するまで」と言うなり。』

「そうではない。七度までとは言わない。七度を七十倍するまでだ」

と。数学でいえば、七×七〇で四九〇度赦せと。もちろん、キリストが「七度を七十倍」と言われたのは、あるいはこれを七×七×一〇と考えてもいい。しかし、ある説によると「七十七倍」というようにもとれるんだそうです。

これは実は旧約に「七十七」という数があるものですから、多分キリストはそう言われたんだろう、という学者の相当有力な説もある。これは創世記4章24節にある。創世記4章というところは、アダム・エバの子の兄カインが弟アベルを殺害した、人類の殺人の血なまぐさい最初の、人間が人間に罪を犯した最初の物語として、殺人ということが行われたという非常に深刻なところです。アダム・エバの子どもにカインとアベルがある。カインがアベルを殺しましたから、アベルの子孫はアベル一代で絶えてしまった。カインの子にはエノクがいて、ずっときて、レメクというのがいます。しかしながら、アベルに代わってセツというのが与えられたことが創世記4章25節にある。

「25 アダム復^{また}その妻を知りて彼男子を生み、その名をセツと名^{なづ}けたり。そは彼神我にカインの殺したるアベルのかわりに他の子^{たね}を与えたまえりといいたればなり。」(創世記4・25)

と。即ち、セツの族からはエノス、エノクが出てきて、

「22 エノク、メトセラを生みし後三百年神とともに歩み男子女子を生めり。」

23 エノクの^{よわい}年齢^{すべて}は都合三百六十五歳なりき。24 エノク神と偕に歩みしが神かれを

取りたまいければおらずなりき」(創世記5・22～24)

というエノクです。それから、エノクからずっときて、ノア、セム、ハム、ヤペテと。このセツの族から後はずっと大きく展開するわけです。そして、殺人者カインの末裔は亡び



てしまう。それで、

「²⁴カインのために七倍の罰あればレメクのためには七十七倍の罰あらん。」(創世記4・24)

というのがある。レメクというのはカインの裔すえです。即ち、殺人の裔に対しては、更にその復讐が烈しく加わってくる。「七十七倍の罰がある」といったような言葉があるんです。そのようなことで、あるいはこれが「七十七倍」であるかもしれない。しかし、「七の七十倍」とキリストが言われたにしろ、「七十七倍」と言われたにしろ、その心はもちろん、これは天的な数でありまして、

「無限に限りなく何回でも赦してやれ」

ということです。人間的限界を超えた、神的な無限界の赦しです。これがキリストの答です。即ち、「²³七度を七十倍するまで」あるいは、「²³七十七倍するまで」と自分は言うとき、キリストは言われた。

●地国の天人

ところで、

²³この故に天国はその家来どもと計算をなさんとする王のごとし。

と続いて続いてくるんですが、今の22節と、それから23節からの後とが果たして直ちに続いている言葉であるか、あるいは別な言葉であるかは、学者がいろんなことを言います。というのは、前と後とが必ずしも話を通じているというわけでもない。しかし、これを読んでいると、別にそう不自然ではないので、話の続きとみていいと思います。

昨日も東寮(清瀬療養所)で私はマタイ伝20章1節から16節までのところを話しました。

「天国は労働人を葡萄園に雇うために、朝早く出でたる主人のごとし」(マタ

イ20・1)

というお話です。ここでもキリストは「天国は云々」と言っておられる。マタイ伝18章でも、²³この故に天国はその家来どもと計算をなさんとする王のごとし」

と、「天国は」と言っている。

この福音は天国の音信おしづれです。

「そうか。天国の音信か。地上の外の、その次の国の音信なら、そいつは少し暇になつてからゆつくり、歳とつてから聞いたなら、そろそろ次の世界に行くころになつたら、聞いたらよかろう」

なんて思う。もし、宗教というものを、福音というものをそのようなことに、天国というものを思つたらば、それはとんでもない間違いです。キリストの言っておられるのは、なるほどマタイ伝も、マルコ伝も、ルカ伝も「神の国」「天国」の消息です。福音とは何か。天国の報せしちです。天国のおとずれです。また、ヨハネ伝というならば、「永遠の生命」のお



とずれです。しかしながら、キリストの言うその天国は、「どこにあるか？」ではない。
「お前たちの中にあるんだ」

とハッキリ別なところで言っておられる。即ち、天国を、

「御意の天に成るごとく地にも来たらせん」

という福音であります。地の国、地国、地獄を——地獄ではないけれども、この地上の国。「地国」という言葉はないでしょうけれども、天国に対して地の国。我々の現世は地国なんです。ダンテのいう地獄みたいなのもありますけれども——この地の国を天国に化する。これを天国的なものにするという意味の天国ですから。「天国は」ということは、この地の国に對するもつとも烈しい音信を、

「天国は」

という。

「この地の国は、地国は、地上の国は」

と言って、一生懸命でこれを直接に問題にしても、どうにもならないのが一般の現実であります。

「この現世をどうする、国際関係をどうする、社会をどうする、家庭をどうする」

なんてなわけで、一生懸命でこの相対的現実を問題にして、これを何とかして政治的に経済的に倫理的に何とか的に、一生懸命でそれを良くしようとしているのがいわゆる文化文明の世界です。ところが、福音はそれを直接に問わない。「天国は」と言う。「天国は」と言いながら、その一番直接に問題にしている地の国をもつとも烈しく問い、またこれを本當に展開させるその消息が「福音」という、この「天国は」というものです。私たちにとっては、その意味における天国で、その意味における私たちは天国人というわけです。

● 一万タラントの負債

²³この故に天国はその家来どもと計算をなさんとする王のごとし。

「バシレイア」という字は「王国」という意味でもありますから、「王のごとし」という。日本語でいえば、それにちよつと点をつければ、「主のごとし」でもどつちでもいいです。

²⁴計算を始めしとき一万タラントの負債ある家来つれ来られしが、

王様は無限の財を持つているから、その王様から一万タラントを借りたという。現実はどういうことか知りません。「家来」という字は「僕」という字です。

²⁵償い方なかりしかば、その主人、

「王」といいながら、今度は「主人」と言った。そこらの言葉の切り替えを、ドイツの学者はこういうところをすぐ、

「王と言いながら、主人と言うのはおかしい」

というようになことで、また詮索する。批評学というのはすぐそういうことを考える。すべ



て論理的に考える。譬話ですから、「王」と言っているのが「主人」と変わったって、その話の移りゆきで、「主人」と言った方がこの譬話の構造からいうと楽になれば、「主人」と切り替わるだけの話だと私は思う。

この者と、その妻子と凡ての所有とを売りて償うことを命じたるに、自分とその妻子と所有物を売るんです。「自分と妻子を売る」というのは「奴隷にする」ということです。当時、人の売買は奴隷になることです。奴隷になって何年か奉仕すると、お金をもらおう。それでもつてだんだん払っていく。

²⁶その家来ひれ伏し、拝して言う「寛くし給え、寛くし給え」というのは、猶予してくださいということ。

「しばらく猶予願います。お金をだんだん集めてから、それからお払いますから、ご猶予をお願いします」というわけです。

さらば悉く償わん
そしたら、みんな償いますと。

²⁷その家来の主人、あわれみて之を解き、非常に憫み深い主人だ。

その負債を免したり。²⁸然るにその家来いでて、己より百デナリを負いたる一人の同僚にあり、之をとらえ、喉を締めて言う「負債を償え」²⁹その同僚ひれ伏し、願いて「寛くし給え、さらば償わん」と言えど、³⁰肯わずして往き、その負債を償うまで之を獄に入れたり。³¹同僚ども有りし事を見て甚く悲しみ、往きて有りし凡ての事をその主人に告ぐ。³²ここに主人かれを呼び出して言う「悪しき家来よ、なんじ願ひしによりて、かの負債をことごとく免せり。

³³わが汝を憫みしごとく汝もまた同僚を憫むべきにあらずや」

この「べき」は非常に強い。「デイ」というギリシア語で、「どうしても、あわれまなくてはならないではないか」という非常に強い言葉です。

³⁴斯くその主人、怒りて、負債をことごとく償うまで彼を獄卒に付せり。³⁵もし汝等おのおの心より兄弟を赦さずば、我が天の父もまたなんじらに斯のごとく為し給うべし』

● 神の赦しの法則

この譬話はマタイ伝の特種^{だね}として、他の福音書にはない。マタイ伝だけにあるお話です。一万タラントという数は大変な数です。これは昔の、まだ私たちの物価騰貴しない前の計算でいいまして、二千万円に当たるそうです。私たちがまだ五銭の十銭のと物の値段を数えていたときの二千万円という数は膨大なもので、当時のユダヤの一年間の国税が大



体、数百タラントである。これは一万タラントですから、キリストはもの凄い数をこの譬話の中にもつてこられた。それに対して、その同僚に貸していたところの百デナリというのは——一デナリは当時の、昔でいうと三十五銭ですから——三十五円でしょ。二千万分の三十五というのはどういうことになるか知りませんが、大体、六十万分の一くらいです。六十万倍の借財を免されて、六十万分の一の借財をしている同僚を免さないという、こういうふとどきなやつ。まあ、数の上から言っても、そんなことであります。

「主の祈り」のところに、

「¹²我らに負債ある者を我らの免したる如く、我らの負債をも免し給え」(マタ

イ6・12)

という言葉がある。さきほど、ペテロが、

「自分たちに悪いことをした者に七度まで赦しましょうか」

と言った。ところが、キリストは「七の七十倍」あるいは「七十七倍」と言われた。さっきのレメタのところは、あれは「剣の歌」という復讐の歌なんです。七十七倍復讐するという。一体、ユダヤ人は非常に報復観念が強い。

「目には目を、歯には歯を」

という。

また、罪はただ大慈大悲で赦されない。キリストの十字架を必要とした。その意味において、罪に対しては罰——「罪と罰」というドストエフスキーの小説もあるように——罪に対しては罰がある。因果応報の事態です。物理の世界よりもおそろしいのは、道徳の世界における因果の法則、霊の世界における因果の法則です。人の目にはどんなに見えるくても、自分をどんなに「ごまかしていても、神さまとこの法則はごまかしのきかない世界である。けれども、物理法則とは違いました、魂の世界には自由がある。自由があるから、またそういう罪が出てくる。しかしながら、またその因果法則を「赦し」という——別な法則、贖いの法則、赦しの法則といえますかね——それでもつて切り替えて、逆転、転回、回転させていくことが神さまにはできる。

人はいざしらず、私のごときは、もしこの神の赦しがなかったならば、とうてい生きていられないことを自ら明らかに思うわけです。何か企てようとしても、三日坊主で止めてしまったりね。今度は、ダンテの研究会は続きますけれども。なかなか実行が困難である。夏休みにこれだけのことをしようなんて思っても、半分できれば大したものだ。まあ、皆さん一人ひとり、胸に手を当ててみてください。神さまがもし、

「何度までは赦すけれども、それから先は俺はしらんよ」

と言われたら、さあ困ってしまう。私たちは自分の間違いを一つ、二つ、三つとだんだん数えていって、

「ああ何回ゆるされた。あと何回までか」



というようなことであります。けれども、

「七度を七十倍、限りなく赦せ。七度ではない。限りなく赦せ」と言われる。

● 赦しの神の實在にぶつかる

これは少しく落ち着いて瞑想してみると、一体、「私たちが神を信ずる」とはどういうことか。やつと思案のあげくに、

「私はどうしても世界の最後には神さまというものがいなくてはならないと思う。」

唯一絶対の神がいらっしゃるはずです」

という結論に到達することは、頭ではあるいはできるかもしれませんが。けれども、そのようなことでもって、神の存在をどのように信じてみても、その人には本当の生命はこない。自分というものをよく見ると、もし、実存的に問われたらば、どう考えてもプラス・マイナスは、絶対にマイナスの方が強い。パウロがロマ書7章で言っているとおり、

「ああ、われ悩める人なるかな。この死の身体からだより我を救わんものは誰ぞや」

と。これは東西古今の、本当に自分とつくんだことのある人はどうしてもその種類の嘆きにくるわけです、人間であるならば。お釈迦さんも、仕方がない、それを悟りの世界で悟入していった。

「ああ、この煩惱をいかんせん」

というわけだね。煩惱の世界から悟りの世界に入った。

ですから、自分というものを本当に見極めていく人は、

「神を信ずるの、信じないの」

なんて、そんな大それた言葉がだんだん自分の口から出なくなる。神が赦しの神であるということが本当にはらわたの底から受けとられてくる人が、本当に「神を信ずる」という世界に入るんです。信仰とは、赦しの神の實在にぶつかるということです。この赦し給う神にぶつかることが本当の信仰の本筋であります。その他の入り方は、いろいろな入り方があるでしょう。けれども、赦しの神にぶつからない限りは、私はその人の信仰は本筋の信仰とは言えないと思う。どんなにその人が霊的な人でありましても、この赦しの神にぶつからない限りは、

パウロは、

「律法の義ただにつきては責むべきところなし」

と言って、自分を義ただしいとしていました。パウロは一面その角度の、自分を義よしとしていた素晴らしい男でありました。意志の強固な人であつたんですよ。けれども、神に対するそのような熱心が、本当に神を拝して歩いているゆえんであるかという点、それは大きな間違いであることを彼はついに自分では知ることができなかつた。それで、その熱心がつい



に迫害となったでしょ。

プロテスタントとカトリックの歴史、キリスト教の歴史においても、あのセント・バーソルミュー（サン・バルテルミー）の虐殺なんていうあんな恐ろしい、カトリックのプロテスタントに対する虐殺があつた。フランスの事態でしたね。ああいうようなことは即ち、

「俺たちの信仰は本もので、お前たちは間違っている」

と言つて、宗教的な信仰信念から相手を殺す。これはとんでもない。これはもつとも神の世界から実は遠いんです、こういう霊的、信仰的傲慢というやつは。それはまだ神を知らないで、「この野郎」と言つて叩き殺す方がまだ単純ですよ。強度の道徳性をかざして相手を審いていくのは、これは実はキリストが最も嫌われたところの世界です。

その霊的な罪をキリストは、

「パウロ、パウロ、なんぞ我を迫害するか！」

と言つて迫つてこられた。もう既にそれは十字架を通つたキリストです。十字架を通つたキリスト、復活のキリストにパウロは撃たれた。初めて、パウロはこのキリストの十字架というものにぶつかった。そして、この十字架が赦しの極みであることに気がついた。ここにパウロの福音の大黒柱がある。即ち、パウロの福音の大黒柱は十字架である。新約聖書にパウロの書簡がもし置かれなかったならば、この福音がどのようにに歴史の上を展開していったかどうかは知らないというくらいに思われるほど、パウロにおける十字架の消息は大事なのです。だから、パウロという男を捕まえてひっくり返して、そして、徹底的にキリストはその十字架を示し給うたわけです。

●十字架のキリストにぶつかると

パウロはロマ書5章で、

「⁸然れど我等がな**お罪人**たりし時、キリスト我等のために死に給ひしに由りて、神は我らに対する愛をあらわし給へり。」(ロマ5:8)

と。私たちがまだ罪びとであつたときに、キリストは私たちのために死んでくださった。

牧師さんたちが、伝道者が、お説教で伝わるものだなんて思つてたら、それはとんでもない間違いです。だから、無力なんです。もし、私がお説教なんかしているなら、私は今限りそんな集会はやめます。お説教なんて、そんなものじゃない。私たちはキリストの赦しという驚くべき事実**にぶつかっているから**——聴くも語るも同じこと——これをただ告白するだけです。身をもつて告白せんとするだけです。

「十字架の言」とは、十字架という**事実**が語るところの言葉です。事実、即言、というものが即ち赦しそのものである。この赦しそのものをもつて一切を担い上げるところのキリストであるから、

「われ七度とは言わず、七度を七十倍するまで」



と言われた。この言葉がちゃんと裏付けをもっている。どんなキリストの言葉も必ず裏付けをもっている。裏付けのない言葉は一つもない。それはペテロは聞いている時はまだ分からんですよ。キリストが十字架にかかり復活するという事実がまだ来ないからね。だから、

「お前たちは今は私の言うことは分からんよ。然れども、今に分かる時がくるから」と言つて、キリストはその先のことをちゃんと見ておられる。

「私が今に見えなくなったらば、今度はお前たちの魂の中に入ってくるから、その時は分かるぞ」

と、キリストが驚くべき本当の自信をもって語っておられるわけです。

ですから、さつきから申し上げているとおり、赦しの神にぶつかるまでは、

「神を信する」

なんてことを言つたつて、そんな言葉はうわつついた言葉で、私は信するわけにはいかん。この十字架のキリストにぶつかつて、本当に平伏して、

「私の一切を担つてくださつた。一切を赦してくださいました。過去・現在・未来の一切を赦してくださいました」

と。私はこれからもまだ躓いたり転んだり滑ったり倒れたりですよ、人間小池なんていうものは。だけれども、その奥は徹底的に私は赦しの現実の中にある。キリストの十字架の赦しの現実の中に。

「お前は何回、罪を犯したから」

なんて言つて、キリストは問わない。人間ならば、それを問うたり、日に三度省みる。道徳の世界では、

「三度省みる」

なんだ。それは私たちは、信仰生活では省みることも、ある意味においては大事なところもあるでしょう。けれども、いわゆる「反省会」なんてもので私の信仰は展開できない。

神さまのキリストにおける赦しにぶつかつたから、私たちの罪をキリストは徹底的に赦し、かつ忘れてくださる。これはヒルティもどこかで言っている、

「神さまの赦しは忘却してくださることだ」

と。過去は忘れてしまう。

「あいつはあんな悪いことをしやがったが」

なんて言つて覚えていない。忘れて、全くそれを棒引きにしてしまう。百万タラントをすっかり帳消しにしてしまった。そんなものは火にくべてしまい焼いてしまった。

●無にしてくださる

私は日々に神さまの前に幼児のごとく、無辜むこのもの、罪無きものとして、神さまは対し



てくださいる。キリストは皆さん一人ひとりにもそのように対してくださいる。

「こないだ、あんなことをしたじゃないか」

なんて言つて、人間のように考えない。全く新しい気持で、「赦す」と言つたらば、キリストの赦しは空手形ではないんだから。完全に罪を担つて消してしまつて、私はしょつちゅう申し上げているとおおり、無なんだ。無にしてくださいる。無色透明な人にしてくださったんだ、私のおなかの中は、皆さんのおなかの中は。ですから、赦された者ということとは、完全にそれから解放されて、前の罪なんか、そんなものはあれども無きに等しきところに置いてくださいる。

犯罪者は、「前科何犯」というふうには、あれはちゃんと書いてある。「天国」とキリストが言われるその「天国は」という世界の法則の中に入ると、「天国は」という世界の赦しとなると、前が前科何犯であろうと、六十八犯であろうと、そんなようなものはもうゼロです。ゼロ犯。常に無罪。即ち、前犯ということはなくなつてしまふ。ゼロ犯者として取り扱つてくださいるのがキリストの赦しです。キリストの赦しはそうです。

心理学から言ひましても、犯罪の記憶というものが心の中にあると、却つてそいつは犯罪へとそそるといふ面があるそうですね。狼が飢えて食べれば、いよいよ食べたくなるのと同じように。ところが、その罪、穢けがれから清められていると、新しくこれにぶつかつて行きますから、前犯意識というものがなくなつていく。そして、本当に神に救われたる神の人としての本然の我の自覚があるから、清らかに強くこの罪に戦い得る新しい力を常に与えられていく。

「罪の深きところ恩恵もいや増す」

というのは、逆に言うところのことです。赦しとは、ただいい加減な赦しではない。十字架の裏付けをもつた赦しです。赦しは極みの愛——十字架は極みの愛ですから——極みの愛をもつて赦されている。この極みの愛という質がそこにかかつてくるんだから、プラスの驚くべき力が、生命がかかつてくるのだから、この赦し即愛に全身は真に感激を覚えて、それに向かつて突き進んで行くことができる。神の赦しは力を与える赦しである。人間の赦しは、

「まあ、仕方がない。ゆるしておこう」

なんていうくらいゆるしです。

「この次、しやがつたらもうゆるさない」

なんて思っているようなゆるしは、ひとつも赦しではない。赦しというならば、私たちがもし赦すと言うならば、このキリストの十字架の赦しをもつて赦すことができる。私たちはどんなに、

「お前たちもそのように赦せ」

と言われましても、人間としてはそれは不可能です。人間として人を、キリストが赦すよ



うには赦せない。キリストのまねをしようとしたって、まねはできない。七度を七十倍してゆるそうとしたって、それはできない。

しかしながら、いつも申し上げているとおり、福音の世界は不可能を突きつけて、そして、その突きつけた不可能を可能にしていくところの世界がこの福音の世界であります。だから、私たちが神に赦されているとは、徹底的に私たちは根底的に根こそぎにされている。根こそぎの赦しだ。根底から根こそぎの赦しにぶつかっているんですから、この根こそぎの赦しのキリストの中に入っていくときに、このキリストの赦しの実力が、十字架の実力が——私たちは人を贖うことはできないが——キリストの贖いの赦しの実力が私たちを通してこの赦しを可能ならしめる。私たちが赦せるのではない。キリストのその愛が、キリストの赦しが、十字架が、相手を赦す。

「ああ、あの人もどんなに罪を犯しても、キリストの十字架はこれをすべて赦しておられる」

と。相手が悔いても悔改めなくても、十字架は赦しをもって、担いをもって赦している。この驚くべきところでもって——

「相手が悔改めてきたら赦してやろう」

ということもあります。けれども——もうひとつ奥の世界は、さきほど言ったとおり、

「我々がいまだ罪にありしときに、神はこのキリストをもって赦した。愛をもって

愛した」

という、愛をもって相手を大きく担うことができる。これは自分ができるのではない。キリストの中に自分を入れたときに、キリストがなしていらつしやることに、

「ああ、キリストはかく彼を赦しておられるか。然り、アーメンでございます」

と言うだけです。それが本当の無理のない赦しです。そして、自分で力んで、自分の中に何かを持ってきて、そして赦そうなんて、そんな二段構えでないところの、一段のキリストの赦しを、彼におけるキリストの赦しを信ずることができる。そのことが同時に、深く自分が彼を赦すことができる事態に入る。何となれば、キリストと我とは、キリストの赦しによって、十字架のキリストは自分とその時にピタッと一つになるからです。その時には本当に何ともいえない神的な世界に入る。本当に神的事実ということは、そういうような罪の贖いの神の、キリストの愛の展開していくところの赦しの消息の世界です。

●十字架を負うことが楽しいことになる

ですから、たった百デナリの云々と、片一方は一万タラントだか何万タラントだか知らないが、もう私たちはその大きな道徳的宗教的信仰的な罪の赦しを受けている。

「心より兄弟を赦さずば」

とは、心より兄弟を十字架の愛をもって同じく担わないならば、ということなのです。



「己が十字架を負いて我に従え」

とは、さあ、「己が十字架を負いて我に従え」ということの本当の意味がここで分かってきた。「十字架を負いて我に従え」ということは即ち、そのような赦しの愛をもつて、担いの愛をもつて——敵を倒すのではない——

「敵を赦し担い上げてしまふところの愛をもつて」ということが「十字架を担いて」ということです。

しからば、十字架を担わなくして、どうして、私たちはこの天国人でありえようか。どうして、この愛を生きなくして、私たちの中に本当に生命ありと言うことができようか、ということになってきます。

「汝ら十字架を負って我に従え」

とは、

「十字架を負わなければ」

というとか非常に苦しいようなことだけれども、

「いや、実に負わなければ私たちには生命がありません。私たちには神さまを、キリストをいただくかなければ生命ありません」

ということになってくる。この「十字架を負う」ということが楽しいことになる。楽しいというのは、キリストの生命は楽しい。

キリストの赦しの霊核をもつた、愛の霊核をもつたものが融合するときにはもの凄い力をもっている。だから、

「二、三人、わが名において集まるところには我もあるなり」

どころのさわぎではない。

「二、三人、わが名において集まるところには驚くべき担いの力あり」

で、私たちはこんな小さな集会だつて、全世界を担えるんです。キリストの愛が担う。いいですか。どうか、その世界には遠慮なく限りなく深く入ってください。

私が「霊的」と言うのはそういうことなんだ。本当に霊的というのは、何も火の上を渡ることではない。本当の霊的というのは、そのようなキリストの担いの愛を徹底的に自分の身体の、生命の、細胞の質にすることです。それでなければ、イエス・キリストの生命はない。イエス・キリストの生命があれば、ああ、我が十字架も何と軽いことでしょう。何となれば、主イエス・キリスト自身が驚くべき担いの方であるから。担っていると思ったら、どっこいこれはキリストと一緒に担って、自分は何分の一だか何万分の一だかしらない。担っているながら、それが梃てこにされているものだから、楽なんだ。物理的にどういふわけだかしらないけれども、こつちに驚くべき支点があつて、楽に上がってしまう。

「七度を七十倍にする」

というキリストの言葉は、



「七度を無限倍する、お前たちにその無限倍の赦しの愛を、力を与えてやるぞ」と。これは十字架のキリストにすれば同時に私たちの中には復活のキリストの生命がくるからです。

●砕けの魂

「二デナリ」、一日の糧における無限の力を昨日はいただきましたが、今晚はまた、この「七度の七十倍」の、「七十七倍」の——「七」は完全数です、黙示録には「七」ということが非常に出てきます。あそこは最後の完全の国だからね。この「七」という字はいろんな意味において黙示録の1章、5章、8章、13章、15章あたりに出ている——赦しをいただく。キリストが「天国は」と言われたときに、

「お前たちの一番大事な現実は」

ということですよ。

「天国ですか。少し遠い話ですね」

なんて思ったたら、とんでもない間違いです。私たちは神に、キリストに徹底的に赦され、常に無罪放免者で、無前科者にされて歩いております。そのような徹底的な赦しであるからこそ、私たちの中に感激と感謝と希望と力とが湧いてくる。その赦しがあるから、

「ああ、そうか。そんなにしょっちゅう赦してくれるなら、ありがたいことだな。

もう勝手にやっつけていこう」

というのならば、それはどっこいその赦しは今度はきかなくなってしまう。

赦しを受けとる心は即ち砕けである。キリストの赦しを受けとる心は即ち砕けである。なんとすれば、キリストの赦しそのものが砕けであった。そのものが即ち神さまの前における砕けである。彼自身が神の前における砕けの魂であった。でありますから、砕けをもって赦しを受けとらないような赦しの受けとり方をしたらば、どっこいそれは今度は赦しの効力がなくなってしまう。赦されていることに甘んじて、本当にその赦しをもって人に対していなかっただらば、

「我が天の父も汝らにかくの如くなし給うべし」

ということになる。

そういうわけで、この18章の罪の赦し、徹底的な「七十七倍」でも「七度の七十倍」でも、無限大の赦しを私たちは日々新たに受けとることによって力を得て、赦しの担い、十字架の担いをもって行けるという強力な福音であります。

